No.140
公民館だより
平成22年11月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

『丹後由良の歴史年表』編纂中

由良地区公民館長　枝　川　隆　亮

盆が過ぎても寝苦しい夜がしばらく続きました。

梅雨時には雨が長く降り、稲作が日照不足で心配をしていましたが、猛烈な日照で取り戻し今年も豊作になりました。

近年にない酷暑と言われた今年の夏も、運動会が終わった頃から少しずつ風が吹き始めました。

五穀豊穣を祝い、無病息災を願う秋の例祭も滞りなく終了し、秋まっしぐらの毎日を過ごしています。

もう少しで、由良嶽の紅葉が始まります。

一年を通してもっとも心地良い季節を感じています。

さて、公民館では「丹後由良の歴史年表」を現在編纂中です。

各自治会から委員を委嘱し、平成20年から現在まで、26回の編纂会議を招集し、古文など難しい文章の解読等困難の連続でした。

長年の懸案であった歴史年表を皆様にお届けできる喜びをかみしめつつ、この歴史年表が地区の発展に寄与できればと願い、ラストスパートで頑張っています。

行事報告

主事　磯田充亮

◎五月二十日（日）グラウンドゴルフ大会（個人戦）

当日は肌寒い北風の中、お年寄りから小学生までの方30人が参加、6班に分かれ実施しました。8ホールを二回周り16ホールの合計打数で競いました。

【成　績】（敬称略）

・男子優勝…野村　孝行（44打）
・女子優勝…新宮さち枝（53打）
・ホールインワン…3回（延3名）
・最多打数……70打

（他の成績は「公民館がいど」でお知らせ済）

◎六月十三日（日）四部対抗バレーボール大会

今年は特に女子の部では各部とも「三部20連勝阻止」を合言葉に団結、三部に挑戦しました。また、三部も各セットでリードされながら逆転する粘りを見せ、1セットを落としたものの20連勝しました。女子三部に記念として副賞を付け表彰しました。

【試合結果】

	男子の部	女子の部
優　勝	三部	三部
準優勝	二部	一部
三　位	四部	二部
四　位	一部	四部

◎七月四日（日）由良川てんころレース

第四回大会が小雨の中、由良浜海水浴場で開催されました。

公民館は昨年同様、地域協賛事業として参加、受付、審判等競技進行係を担当しました。

今年は天候不順で順延となった消防団の操法大会と重なり、少人数で参加者を迎えました。

参加26チーム二千人余りの観客の中、レースは各チーム力が均衡し順位に写真判定あり、同着でジャンケンがあり、応援にも熱が入り盛況な開催となりました。

◎八月十五日（日）四部対抗ソフトボール大会

当日は35℃の猛暑の中、52名の選手（女子1名含む）が参加、優勝めざし熱戦が繰り広げられました。

優勝戦は同点で迎えた最終回、一部の攻撃2アウト満塁のチャンスにセンター前ヒットでサヨナラ勝ち4×対3で一部の5年連続優勝が決まりました。

結果は次のとおりです。

【試合結果】

優　勝…一部／三位…四部
準優勝…二部／四位…三部

◎八月二十二日（日）盆おどり大会（地蔵盆）

熱帯夜が続く日々十三夜の月が輝く空の下、子供地蔵盆世話人と共催で開催しました。

会場は提灯で飾られたやぐらを中心に由良踊り保存会の皆さんによる演奏や踊りに合わせ、多くの御婦人や子供達が「えいへいや」等踊り、熱い夏の夜を楽しみました。中でも浴衣姿で踊る三歳位の女の子が目につきました。小学生達も上手に踊るのを見て、伝統ある「えいへいや踊り」をこの子達が後継者に育ってくれたらと思いました。

◎九月五日（日）由良地区運動会

猛暑の中、小学校、幼稚園と合同で開催、熱中症が心配される運動会となりました。

競技内容も「満水リレー」を加える等一部変更をしました。

今年の特徴は競技が終了する度に順位が入れ変わり、最後まで緊迫した争いとなりましたが最終種目、四部対抗リレーの結果で優勝が決まり、応援も熱を帯び高揚する中、三部が制し7年振りとなる総合優勝を手にする結果となりました。

結果は次のとおりです。

総合成績		リレー成績	
優　勝	三部（227点）	三部	
準優勝	一部（209点）	二部	
三　位	四部（206点）	四部	
四　位	二部（193点）	一部	

私の小さかったころ

由良小学校　教頭　公庄晴美

私は一人っ子で、親が年をとってからできた子ですので、かなり溺愛されて育てられたようです。なにしろ、友だちとけんかして、そのことを家に帰ってから訴えると、その友だちの家に「晴美をいじめた。」と言って怒鳴り込みに行くほどだったのですから。実のところ、これには困りましたが。

小さい頃の遊びといったら、すわりこんでの「石取り」。小指が地面のコンクリートにすれて血をにじませながら、取った石の数を競ったものです。また、わらで編んだ縄を父親からもらい、それを持って、大勢の友だちを誘っては長縄跳びをしました。夕方、薄暗くなるまでしていたのを覚えています。

夏は、家の前を流れている牧川での自由遊泳。友だちと橋のたもとの深いところに、繰り返し飛び込んでは遊んでいました。とても楽しかったことを思いだします。父が当番で川の上から見てくれているときがまた、とびきり嬉しかったです。

遊びの中で、いろいろ知恵も人間関係もいっぱい学んだように思います。今の子ども達の中には、テレビゲームばかりしている子もいるようですが、ぜひ体を動かして風と土と太陽の下で遊んでほしいものです。

父と母は、繭から生糸を紡ぐ「生糸製造」の仕事をしていました。お湯で煮た繭から糸を紡ぐのですから、真夏など、父も母も汗びっしょりで働いていたのを思いだします。両親は、私が小学生の間は自転車に乗って遠くへ行くのは「危ないからだめ！」と大変いやがりました。

また、私が出かけるときには、判で押したように「あの細い道から大きい道へ出るときは、必ず止まるんやで。」と繰り返し言っていました。「同じことをいつも言ってうるさいなあ…。」と心の中ではいつも反発していましたが、言われていたその場所では、自転車で走っていても歩いていても、なぜか必ず止まって右左を確認し気をつけたものです。また、挨拶の大切さも両親から学びました。

一生懸命に働く両親を見て、働くことの大変さやきびしさも学びましたし、こんな両親を裏切ったりはできないなあと思ったものです。また、繰り返し繰り返し言って聞かせることは子どもの心に残っていきます。一生懸命誠実に生きている親の後ろ姿を見せていくことはとても大切だと思います。

年齢を重ねるにつれて、人があまり経験できなくなることの一つに大声で叱られることがあると思います。父や母に叱られた記憶も、もうかなり遠い昔の出来事のような気がします。

わたしには、3人の子がいますが、この子どもたちが社会人になり、子どもらを大声で叱りつけることは、ほとんどなくなりました。この頃は逆に私が叱られています。

「お母さん、食べるときは肘つかない。」「ぺちゃぺちゃ音をたてて食べない。」すべて、私が子どもたちに言ってきたことばかりです。

まさに〝負うた子に教えられる〟です。

実はこの5月に83歳の義父が、田植えの苗運びで肋骨を折る大ケガをしました。もうだめかと覚悟をしていたのですが、なんと1ヶ月あまりで退院しました。もともと新聞を読むことが大好きで、出かけることも大好きでおしゃれ好きな義父は、息子である私の夫を「上着を一緒に買いに行ってほしい。」と誘ったり、「ゲートボールに行こう。」と誘ったりと元の元気さを取り戻し

ました。

このことから、いくつになっても何事にも興味や関心を持つことは生きる意欲につながるんだなと痛感します。

これからも、幼かった頃に両親から教わったことや人のつながりを大切にしながら、感謝の心を忘れず、楽しく生きていきたいと思っています。

運動会雑感

浜野路自治会　会長　中西眞夫

浜野路選手選考会の冒頭挨拶の中で、

一、この運動会を通して、地区民の更なる親睦や連帯感が高まることを期待しています。

二、やるからには、優勝を目指し、この選考会で十分検討し、人材を発掘して頂きたい。

三、炎天下の運動会になることが予想されます。選手の皆さんはもとより、応援の皆さんの健康管理に十分留意して頂きたい。

旨お話をさせて頂きました。

後日、公民館分館長さんと共に、特に四部対抗リレーに出場依頼をしましたが、それぞれ事情のある中で、「よし、わかった」という多くの方の返事を頂き、とても心強く手応えを感じることが出来ました。

運動会当日は、予想通り炎天下の運動会となり、熱中症で体調を崩される人が出るのではないかと心配しましたが、早朝より準備に当たって頂く方、テントをもう一張り貸してくださる方や、当番の班の皆さんが、たくさんのお茶やスポーツドリンクやあめ玉など準備して頂くなど、細かい心遣いをして頂きました。お陰様で健康を害された方もなく、無事終えることが出来ましたこと大変嬉しく思い感謝申し上げます。

また、競技の面でも得点を見ながら一喜一憂をする状態が続いていましたが、最終の四部対抗リレーでは、だれからともなく大きな拍手、手拍子が沸き起こり、まさに一致団結、心が一つになった瞬間でした。特にご婦人の皆さんの熱気に圧倒されました。女性の力はすごいなーと改めて感じさせられました。

今回も小学校との合同開催ということで、少人数とはいえ、子ども達の生き生きした姿を見ることが出来ましたが、この流れをどうにか出来ないものかと歯がゆく思った次第です。

何はともあれ、久方振りの総合優勝と四部対抗リレー一位という完全優勝を成し遂げることが出来ました。これも地区皆様の一致団結したご支援、ご協力の賜と感謝を申し上げます。

終わりになりましたが、公民館を始めとして、開催に携わりご尽力を頂きました全ての皆様に厚く御礼申し上げます。

来年もまた楽しい充実した運動会になりますよう祈念しまして結びと致します。

平成21年度　明るい選挙啓発標語入賞者

京都府選挙管理委員会委員長賞

あなたの一票
明るい明日（あす）への　大きな力

（由良小学校6年　蒲原（かまはら）　穂香（ほのか））

出でよ有志の輩、知恵と力を由良へ

中西　六右衛門

由良が宮津市に合併してから、私の認識不足かもしれないが由良の将来像が示された事があったであろうか？何年後には由良はこの様にするのだ！この様になるのだ…だから皆も頑張ろう、努力しようと…そして地区民が期待し協力し、その結果として夫々の時代に一筋の光を見い出せたであろうかと…。

振り返るに、由良地区として宜しくお願いしますと宮津市へ依頼し、お願いする事に終始したのではないかと…私もお願いする当事者になった時代も含め部分的な改善、改良のみで由良の将来像を描いて宮津市に依頼し、共にそれに向かって努力した記憶は残念ながら無いのが実状であります。

実際、由良は宮津市の一部分となり、現在まで行政の方向性と取り組みの流れの中でしか生きられない時代が続いたと思います。

しかし、疲弊した日本は今になって国も地方分権ならば、都市でも地域分権…各地域が自分の所を考えて提案し、実現に協力し、共に行動する、又は行動しなければならない時代になって来たと思います。今迄地域が考える事は、インフラ（地域生活環境）整備への陳情が主体であり、近年は由良をどの様にするかの未来志向の提案を聞いたことは殆どありません。

しかし由良地区も四〇年程度前は結構元気であり、由良地区の産業として農業は「みかん」、観光は「海水浴の民宿と浜茶屋」、漁業は「釣り舟と地引網」。その実現の為に、ミカン農園の整備、山林開墾による蜜柑園の創設、消毒の共同集中配管、先進地の視察等、観光の為の簡易水道、プロパンガスの共同配管、海岸整備とシャワーや便所整備、共同PRと勧誘キャラバン等を中高年が中心に率先努力願ったものでした。その結果はそれ相応に成果があり、現在もその余韻で続いている物もあると思います。あの当時の活力は何処から生まれどうなったものなのか検証すらしたくなります。

そこで現状を嘆き悲観しても決して良くも進歩も無い訳で、由良を現在の流れから変える為には起業家ならば現状を分析し、事業計画（将来像作成）を立て、事業目論見を行い、着手計画を立て、実行に入る訳です。その第一歩として由良の人口分布と将来変化を予想します。

平成22年3月31日現在で、人口1、228人。平均年齢50.1歳（内、男563人…43.6歳／女665人…56.5歳）、20歳以下は80人で全体の13％、60歳以上は605人で49％と半分を占め、このままでは10年後には人口は1、066人、今の85％。25年後には660人と今の半分になります。

さあ、そこで夢を描きましょう。夢と目的目標が無ければ変わらない。

由良を安全、安心、親切な町にする。幼稚園は無くなるが保育所が出来る。小学校は無くなるが学習リハビリ健康学校が出来る。学校給食は無くなるが老人健康給食が始まる。在宅ケア、訪問ケアが充実する。夏だけの海水浴から砂と海水を生かした健康施設と塩造り健康体験が始まる。荒廃農地はガンバリ組合が管理し空家と共に農地付き住宅として斡旋管理する。近辺への通勤最適環境地として安価で住宅と農地を斡旋する。光ファイバーでIT充実、在宅勤務とIT利用企業を誘致。旅館は修学体験旅行と大学のサークル合宿を誘致。由良出身者にふるさと納税と由良訪問を依頼し継続

実現に努める。

それらを実現に向けて仮称「由良げんき組」を作り、行政をリードするほどに楽しく頑張る。それは誰がするか？出来ない理由は一杯だが、どうすれば楽しく実現できるか考え行動出来る熟年パワーが結集出来ないものかと思うこの頃です。

しかし歳には勝てぬもの、地区への提案もこの位にして、後はゆっくり拝見しましょう。

坂本龍馬　由良を走る

絵：みもり　あきら

ふりむけば
一人じゃないよ　みんないる
（人権標語優秀作品　小学校6年生）

なりたいな
相手の気持ち　分かる人
（人権標語優秀作品　中学校1年生）

小学生最後の運動会

六年　大石剛士

九月五日に小学校で由良地区運動会がありました。まず最初にぼくが出たのは、徒競走です。いっしょに走ったのは帆乃夏ちゃん、遥奈ちゃん、浩平君で走りました。一位はとれませんでしたが、二位をとりました。次に出たのは、玉入れです。港と戦ったけど負けました。くやしかったです。次にざる引きをしました。けど一位どころではなく、びりでした。ざんねんでした。次に花がさ音頭をおどりました。最後の言葉を大きな声で言えてよかったです。次はお昼ごはんでした。おべんとうがすごくおいしかったです。もちろん最後には大好物のナシを食べました。

午後からの運動会が始まりました。次に出たのはふれ合い玉入れです。白と戦いました。でも同点でした。まあいいと思いました。次にぼくが楽しみにしていた「白い親子たち」が来ました。ぼくは、お父さんにおんぶしてもらって、こなの所まで行ってもらいました。そしてそこであめを食べてざる引きをしました。顔が真っ白でした。みんなに見られるたびに笑われました。顔を洗ってテントへもどりました。次に出たのは、２色対こう全員リレーです。だけど差がありすぎて赤が負けてしまいました。くやしかったです。最後に出たのは四部対抗リレーです。最初にレーンを決めました。ぼくは、４レーンになってしまいました。そしてぼくのチームは二位でした。そして優勝したのは、浜野路です。すごくくやしかったです。来年は中学生になって、勝ちたいです。

運動会

六年　大森　帆乃夏

九月五日は、運動会でした。初めに開会式をしました。私は、児童会会長なので運動会であいさつをしなければならないので、何日も前から考えていたあいさつをしました。とても、あいさつは、きんちょうしたけどがんばって言えたのでよかったです。

種目「徒競走」では、一生けん命走れたのでよかったけど、四位だったので、くやしさが残りました。

次は、「地区対こうの玉入れ」でした。浜野路地区と、わき地区が一緒にやりました。

両方とも一勝一敗で引き分けだったのでよかったです。

午前中最後の種目、「花がさ音頭」は、今まで練習した成果が見てもらえるようにがんばりました。

私は、花がさ音頭は、ピシッと決める所は決めれたのでよかったと思いました。

お昼は、家族でお弁当を食べてとてもおいしかったです。

午後から、一番初めの種目は、「玉入れ」でした。赤対白で引き分けだったけどおもしろかったです。

ＰＴＡ種目の「白い親子達」では、練習では、あまり白くなれなかったけど、当日、運動会では、白くなれたので、題のとおり白い親子達でした。

二色対こう全員リレーでは、初めの時は、赤がちょっとリードしてたけど、だんだんはなれていってしまい、最後には、負けてしまいました。正直、本当にくやしかったです。

でも、バトンパスが上手になっていたのでよかったし、秒も新記録で早くなっていてうれしかったです。

最後の種目、「四部対こうリレー」では、一番初めに走らないといけなかったので、とてもきんちょうして、言葉に出せないくらいでした。

リレーで浜野路が一位でゴールしたのでうれしかったです。

今年の運動会は浜野路が優勝してよかったけど、赤チームは、負けてしまったのでくやしかったです。でも、とっても楽しい運動会でした。

運動会

六年　田村　遥奈

九月五日に、運動会がありました。

開会式の後、徒競走をしました。

怜奈が一番なのにびっくりしました。私はがんばって走りました。浩平君とたけし君にぬかされたけどゴールできてよかったです。

玉入れは、入れていると私の背中に玉がみごと命中しました。

次に花がさ音頭をしました。立つ時にテンポが早かったので「あっ」と思いましたが、なんとか合わせました。

お昼休みは、いっぱいありました。

２色対こうリレーは、がんばって走りました。みんなで走って５分20秒きって５分12秒でした。うれしかったです。

そして閉会式で優勝旗とかをもらって終わりました。

運動会は、ドキドキしたりしたけど楽しかったです。

そしてリレーは優勝できて、とてもうれしかったです。

絵：みもり　あきら

暑かった運動会

六年　森田浩平

九月五日に、運動会がありました。この日はけっこう暑かったです。

初めに開会式がありました。地区別にならびました。ぼくは、ラジオ体操の時に前の台にのってしまました。きんちょうしたけどうまくできてよかったです。

そしていきなりぼくの出番がありました。それは、徒競走でした。けど、ようち園からだったのでぼくの組までくるのにけっこう時間がかかりました。そしてぼくの組の番でスタートし、ぼくは1位でした。うれしかったです。

次に出たのは玉入れでした。1回目はあまり入らず負けました。2回目はけっこう入って勝って引き分けでした。

そして、次はザル引きに出ました。出たのは、ぼくとはやとくんでした。ぼくはけっこううまく引けました。

そしていよいよ花がさ音頭がありました。初め走ってくる時もうまくいっていたし、おどりもうまくおどれていてすごくよかったです。

終わるといっぱいはく手をもらえてうれしかったです。

そして昼ごはんを食べました。おいしかったです。

遊んで午後の部がありました。初めに玉入れがありました。今度はけっこう入れれました。

次は親子競技の「白い親子たち」でした。ぼくはアンカーでした。小麦粉の中のあめをとるのは、すごくおもしろかったけど、小麦粉だけ口に入った時少しせきこんだけどだいじょうぶでした。

そしてとうとう二色対抗全員リレーがありました。初めから少しずつ差をあけぼくの受け取る時には、けっこう差があって勝ちました。みんながんばっていたのでよかったです。

最後に四部対抗リレーがありました。ぼくは二区でした。四位から一気に三人ぼくは、ぬきました。そして浜野路が勝って浜野路が優勝しました。すごくうれしかったです。

暑かったけどいろいろ出られてよかったです。

今年も豊作だ!!

小学校グランドでの稲刈り風景

栗田への峠道を探索して

大阪市　青木敏之

平成二十二年ゴールデンウィークの真ん中である五月二日、由良から栗田への峠道を探索するために、息子の荒義と私のクリニックを受診する患者さんのひとり岡本氏を伴って由良に到達した。

以前より昔の人は由良から栗田へはどのような経路で通っていたのだろうかと興味を持っていた。由良駅から西をみると奈具海岸から急に高くなった尾根が南に延びたのち一段落ちこんで峠のようにみえる。しかし、これは栗田よりはるか手前のひとつの峠にすぎず、そこから先は七曲八峠と呼ばれる難路につながっている。この道は途中まで歩いたことがあるが、栗田のずっと手前で土砂崩れに阻まれて断念したことがある。今回は国土地理院に載るもうひとつ南側の峠道を歩いてみようというのである。

昨年十一月に宮津を訪れた折、戦時中私が小学三～五年の間に、疎開した先であった脇の梅田の向かいの奥野さんと挨拶を交わした際、「由良の歴史をさぐる会」というものがあり、飯澤登志朗さんとおっしゃる方がその世話人をされていると伺っていた。今回の由良行きをその飯澤さんへ連絡していただいたところ、列車の到着時間に合わせて由良駅で待って下さっていて資料をいくつかいただいた。そして小学五年で別れて以来、約五十年ぶりにハクレイ酒造の中西六右衛門さんを訪れる約束もしていて、電話で在宅を確かめてすぐに向かった。六右衛門さんの家に近づくと向こうから五十年ぶりの懐かしい顔が見えた。やっぱり面影が残っていて見間違えることはなかった。挨拶を交わしお庭でお茶を頂戴したあと、松原寺、如意寺などをご案内いただいた。

その後、宿に荷物を置きさっそく峠に向けて出発した。

目的の峠道は最近は誰も登ったことがないと伺ったので、それならば挑戦し甲斐があると勇躍登り始めた。奈具神社の上の道から薬師堂跡を経て進む。薬師堂への石段は残っているがお堂はすっかり解体され片付けられている。登り道の取っ付きがわかりにくかったが、見つけるのにそれほど苦労を要さなかった。イノシシが掘り起こした竹やぶの中をすり抜けて突き進んで行くと、杉林と化した田圃跡がしばらく続いたが、まもなくそれも途切れ山道に入った。イノシシ除けに大きな音をさせて歩く。やがて自然林となり山道らしい跡は広くはないがしっかりと残っている。左に谷を見ながら登っていく。まもなく、真っ直ぐ登るには足首が曲がりきらない急斜面となり、さりとて横に歩くと踵が曲がるのでそれも辛い。枝をたよりに少し登っては休むことを繰り返す。途中立派に枝を張った大木があった。ようやく少しなだらかな尾根に到着する。そのあたりにはしっかりとした踏跡の道がある。登ってきた尾根から外れるように下る道もある。間違いなく昔人々が通ったであろう道であった。そこから上は道らしいものは一部は残り一部は消えており、それを辿って登っていくと尾根に到達した。これが目標の尾根と思ったとたんに、また前方に一段と高い尾根が現れた。おそらくそれこそが目標の尾根であろうことは地図で確認した。次の尾根はかなり高く見えたが、連れの二人にはもう少しと激励しながら登っていった。しばらく行くとまた斜面は急になり、三人が別々のルートで尾根を目指した。私が登ったルートにはギンリョウソウの群が芽吹いて

いた。尾根で合流し、次に目的の南北に走る尾根の先端まで行こうと登り始めた。

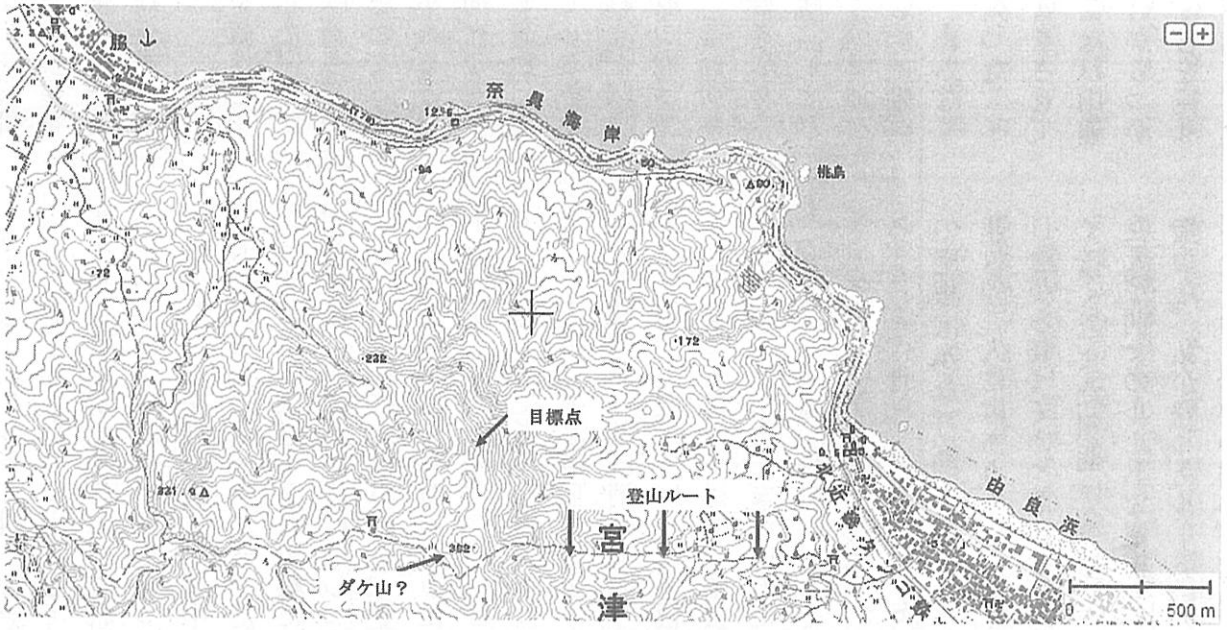
地図上には三八二メートルピークと記されている小さな小山があり、その周辺には他とは違う太い杉と松の木が群生していた。石碑の類は一切なかったが、由良か栗田のダケ山ではないかと考えられた。そこから尾根の先端まで行けば天の橋立が見えるのではないかというのが当初の計画であったので、尾根に沿って北へ進もうとしたが急な落ち込みがある。村から眺めたときは、まばらに木が生えているのみに見えた尾根が、実は非常に密に木が生えており、たとえ尾根の先端まで行ったとしても橋立の展望は望めないと判断し、時間の制約もあってそこで断念することにした。

登る時に見つけた下り坂を辿ったが、それはまもなく道が消えて急斜面になった。やむなく元の踏跡のない尾根に戻らざるを得なくなった。おそらく土砂崩れのために道が消えてしまったのだろうと思われる。下って行くにつれ広い道が数条並んだり交ったりして続いており、かなりの人がこの道を通ったのではないかと思われた。最後は無事に田圃跡、薬師堂を経て首挽松のところへ到着した。

その夜は海月楼に飯澤さん、六右衛門さんを迎え、いただいた酒呑童子の喉ごしを楽しみながら懇談会を持ち、歩いた道のあらましをお伝えした。また六右衛門さんとは昔を振り返り懐かしい思い出話、飯澤さんとは由良の歴史会の話を伺いながら夜遅くに散会した。

翌日、前夜に味わった酒呑童子を大阪で楽しみたく土産に買い求め、愛用する由良駅の喫茶兼食堂兼バー（三度目である）で若い二人が昼の軽食を済ませ（私自身は鎌倉武士を真似て一日二食で昼食抜きである）、宮津行き列車を待っていると、以前に食堂でお逢いした記憶のあるお顔の人がプラットフォームに現れてこられ、どこに登ってきたのかと問われたので、経緯をお伝えすると、それは自分の山だとおっしゃったのでビックリしてお名前を尋ねた。中西衛さんということがわかり、我々が歩いたのは黒見谷道ということを教わった。次回は訪れる折に黒見谷道などにつき詳しく教えていただこうと思っている。これはますます面白くなってきた。

— プロフィール —
青木敏之
小学生の頃、学童疎開で由良小学校に在学。
現在は大阪市で医者としてあおきクリニックを開業。



四部対抗バレーボール大会

有本仁美

平成二十二年六月十三日、恒例の四部対抗バレーボール大会が行なわれました。

今年の大会は、浜野路女子が二十連勝することが出来た記念すべき大会になりましたことをとても嬉しく思います。

思いだしますと、私が初めてこの大会にお誘いを受けたのがちょうど二十年前になります。私はバレーボールといえば、学校の授業でやったことがある程度でしたので、浜野路の大先輩方に守られながらドキドキし、「どうぞ、私の方にボールが飛んできません様に…」と心から願っていたものでした。その後バレーボールサークルにお邪魔させて頂き、すっかりバレーの魅力に取り付かれてしまいました。

木曜日の夜にバレーが出来ることをとても楽しみにしていたことを思いだします。

その日によって調子はさまざまで、とても乗りが良くて、ボールをしっかり捕えられて、タイミングもバッチリで、足も良く動き、キラキラの爽やかな汗を流した日もあれば、今日も頑張ろう！と思って行っても、すごくリズム乗りが悪く、ことごとく失敗し、どんどん消極的になって…。

「私って何やってるんだろう。」と自己嫌悪にどっぷり陥ってしまったりする日の繰り返しでした。

そんな中、二十年もの歳月が流れ、我ながらびっくりしています。

宮津での試合に出れば、必ず帰りには「反省会」と称して、喫茶店に寄り道して、皆でケーキを食べながら、今日のプレーで悪かったことや、相手チームの顔が怖そうだったとか、口々に鬱憤を晴らしスッキリした気持ちでみんなと別れたものでした。

こうして二十年もの間楽しく続けて来られましたのも、一緒に汗を流し、笑い、悔しがり、頑張って来た仲間の皆さんがおられたからこそと、感謝致しております。

私にとってバレーボールとは『体力向上』二十代よりも現在の方が元気だと実感します。『元気の素』嫌なことがあってもふっ飛びます。

体力の続く限り、これからもみんなと仲良くやって行きたく思っています。

また、二十連勝と言いましても、他の地区と接戦の末の優勝でした。

ライバルチームの皆さんにおかれましては、早く浜野路の連勝を阻止出来る様、力を合わせて頑張って下さい。

そして浜野路チームは、今後若い選手の皆さんを中心に、三十連勝目指して頑張っていただきたいと思っています。

由良地区の皆様、バレーボールを通じて仲良く致しましょう。

絵：みもり　あきら

平成21年度　北方四島ビザなし交流訪問事業（北連協主体の船）

参加雑感（3）

浜野路　岸田博司

交流団長、副団長の挨拶（ロシヤ語がほとんど解らず通訳様を通じて理解できました。）料理は美味しく、日本人好みに調理してありました。飲み物はワインとウォッカが出ていましたが、ウォッカはあまり飲み過ぎないように、との親切なアドバイスもありました。

「友好の家」とは、所謂「ムネオハウス」と呼ばれる建物で、日、ロ友好交流のため建てられた家で、北方領土ビザなし訪問事業で国後島に上陸した時は毎回立ち寄っているとのことでした。

今回の訪問団員の中に衆議院議員の鈴木宗男様がおられ、「友好の家」で夕食の料理を担当されていた年配の女性が、ムネオさんとは九年ぶりにお会いでき懐かしいと云って、大層喜んでおられ、時空を越えて語り合っていました。

和気あい合いの歓談の時間が過ぎ、定刻どおり、お開きとなり、有意義な夕食交流会を過ごすことが出来ました。

（十九時五十分）古釜布港へ移動、はしけに乗船して、ロサ・ルゴザに帰船しました。（二十時十五分）

（十一）古釜布港より日本船（ロサ・ルゴザ）で択捉島内岡湾に向け出港

［現地時間］二十時三十五分

船内泊です。出港後3時間ほど経ったころ、国後水道に近づいたようです、船が揺れ始めました。国後水道は、国後島と択捉島の間を流れる海流の道で、流れが強く船が良く揺れ、最も危険な海域であるといわれていましたが、だんだんと揺れが大きくなり、少し船酔いした気分になりました。すぐに根室で買った酔い止め薬を飲み、眠ることにしました。数時間寝た後は、船酔い気分は無くなっていました。揺れも少なくなったので、朝4時ごろ起きて甲板に出てみると、吃驚仰天しました。思いもよらぬ風景を見ることができました。夜明け間近の美しい空に、数え切れない程多数の海鳥とカモメが群がっており、船（ロサ・ルゴザ）の周辺の上空を飛び回っており、又船の近くの海面にも着水して泳いでいました。すばらしい光景で、写真を撮るのも忘れ、しばし呆然として見とれていました。

海鳥やカモメは何処から来たのか解りませんが、白色と黒色の2種類がいて、船と一緒に移動しているようでした。北の海の動物センターから参加された団員の方が、すでに早くからバードウォッチングされておりました。

どうしてこんなに多くの鳥が

（十）「友好の家」での夕食交流会

［現地時間］十八時十分～十九時三十五分

友好の家に到着するのが少し早かったため、夕食の準備中であり、しばらく待機しました。

友好の家は、どの部屋もきれいに清掃され、大切に維持管理されているように感じられました。但しトイレの数が少なく、待機中の団員の利用で混雑しました。準備が整い、来賓のコーワリ南クリル地区長、ザジラコ地区副行政長、スモルチコフ「クリル」日本センター長も来られ、いよいよ夕食交流会の開催です。

いるのですかと尋ねたところ、海の下に海鳥やカモメの好きな餌の、おきあみが無尽蔵にあるので、色々な鳥が集まってくるのですと、懇切丁寧に説明をして頂きました。

船中での朝食は、朝5時から開始しますとの船内放送がありました。船での食事はダイニングサロンが食堂となります。

団員全員が一同に集まり会食することはできません。部屋毎に指定され、2回～3回に分かれて食事をすることになります。

朝食を済ませ、いよいよ今日は北方領土で一番大きな島、択捉島の内岡へ上陸できます。心をはずませ上陸の準備に取り掛かりました。

(十二) 択捉島　内岡湾着　投錨

七月八日（水）天気　晴

［現地時間］六時四十分

はしけのトラブル（理由不明）により、迎えが遅れるとの連絡が入る。再び狭い船内での長い待機となる。度重なる艀のトラブルのため団員は不信感を持つようになる。

（十二時二十分）やっと艀が迎えに来てくれ乗船する。

（十二時四十分）予定より概ね6時間遅れて、ついに択捉島に上陸することができました。

（十二時五十分～十三時四十分）「芸術学校」を視察した後、択捉島を管轄するラズミシキン「クリル地区行政長」を表敬訪問しました。山口団長の挨拶に続き不機嫌そうな態度を表していたラズミシキン行政長からここで問題発言が飛び出した。「ロシヤ固有の領土であるクリルの島へようこそ」とけんか腰で挨拶して、我々団員を驚かし又、不快感を抱かされました。歴史的にも我国固有の領土である北方四島で、このような出迎えを受け、憤りを感じました。さらに「艀が遅れたのは入域拒否ではない」「改正北方領土問題解決促進特別措置法（北特法）を取り消さない限り、今後のビザなし交流訪問は受け入れない」と、はっきり明言しました。これを聞いて、同行の鈴木宗男衆議院議員が激怒しました。

「法律は日本国内の地域振興が目的で、対象となる地域への財政支援などを可能にするものである。」又「ビザなし交流は国と国の合意である、地区の行政長が決める事ではない」と反論しました。以後、激論の応戦となりましたが、通訳様もさぞ難しかったであろうと思います。

間違った通訳をすれば外交上の問題となります。ロシヤ語の辞書を片手に同行されていた外務省欧州局ロシヤ課の担当者と確認、相談をしながら慎重に通訳されておりました。

終戦後不法に占拠された北方領土の返還は、戦後六十五年経過した今も返還の目途も立っていない現状です。この後、ロシヤ人の家庭をホームビジットして感じたことは、島のロシヤ人がすべて反日感情を持っているとは思えないことでした。しかしながら、ラズミシキン行政長のような考えを持ったロシヤ人が要職についている限り、返還は難航すると考えられ返還は長期化すると思われますが、引き続き粘り強く返還運動を推進していきたいと考えております。

尚、以下の詳細のついては、思うところあり、私的見解は控えさせて頂き、ビザなし交流で実施した項目のみを時系列に列挙させて頂く事とします。

ア、（十三時五十五分～十四時二十五分）
墓地清掃

イ、（十四時三十分～十四時四十五分）
「ギドロストロイ事務所下の海岸」の海岸調査

ウ、（十五時～十八時）
ホームビジット（ロシヤ人家庭）

エ、（十八時四十分～十九時）
はしけ移乗、帰船（船舶内）

オ、七月九日（木）天候　曇り
択捉島2日目（九時～十三時）
悪天候のため下船出来ず、

船内で待機

カ、（十三時）
天候回復が見込めないため、択捉島上陸を断念して、国後島へ向け出港する

キ、七月十日（金）天候　雨
（二十四時十分）
国後島古釜布湾到着。（船内泊）

（九時十五分～九時三十分）
出域手続き。

ク、（九時五十分）
根室へ向け出港。

ケ、（十二時十分）
根室港（琴平町岸壁）に入港、事務手続、下船

コ、（十二時三十分）
千歳会館着

サ、解散

以上

追記

後日、北連協の事務局長から連絡有り、択捉島で印象深い歓迎？の挨拶をされた、ラズミシキン行政長の行いが問題となり、解任されサハリン州に召還されました。

この事により、ビザなし交流が再会され、北方四島在住ロシヤ人七十五名を岩手県盛岡市への受入れが決定されました。

北連協の船（ロサ・ルゴザ）のダイニングサロンでの懇談会 ▶

内藤（日経新聞記者）
伊奈（日経新聞役員）
鈴木宗男（衆議院議員）
妹尾（全口防衛協会会員）
野々口（全口防衛協会役員）
山口洋子（団長）
岸田博司（全自父役員）

（左上より順に）

老笑歌

坂本妙子

無理せずに
無茶もしないでのんびりと
余生楽しむ生涯学習

オレオレの詐欺じゃないけど
あれあれと
あれをさがして今日も暮れゆく

三才（妹）が五才（兄）のほっぺに
チュしてにこっ
曾孫愛しく命永らう

乗り換えの
もうない終点近づいて
人生の旅楽しんでいる

化粧水のセールス電話
歳聞いて
お若いですね又今度だって

ピカ・ドンの広島市とかかわって〈覚書〉

濱野路　大森　孝

（一）

私の１９４５年８月６日(月)。同じ時刻には16才３ヶ月余りで、山口県防府市の海軍通信学校の校舎のあとへ入って学んでいた海軍兵学校予科78期生徒だった。８月６日の前日は待望の上陸で、防府の街並を午前九時頃よりハレやかに二種軍装を着して潤歩していた。(防府は隣接して予科練習生の飛行場があって、木製の飛行機が二機おいてあるのが視ることができた。)

(※) 山陽本線の駅名は『三田尻』とよんでいたし、豊後水道よりの米軍機の来襲では『中の関』という地名が頼りと使われていた。

防府市内には通信学校が開戦前から設置され、海軍の施設として機能していた。

ここで、私は広島市内の旧制中学から同分隊(三〇三分隊)同級の戸上一君を識ることとなる。色白の、どちらかといえば口数のすくない戸上生徒は、あまり印象に残る方ではなくて、私との席次では『アイウエオ順』で配慮され、自習室や寝室の配置などその外の点でも格別身近ではなく、関わりはむしろ薄かったかな!!と思われるが、当時新型爆弾と公式によばれた『ピカ・ドン』の投下機は、俄かに彼戸上一君が分隊内で刮目されるようになった。

タブロイド版の新聞が、生徒食堂の一角に申し訳のように掲示された。翌日８月７日の本校を狙っての優に百二十機を超える、B29を主とする爆撃機と戦闘機による校舎焼夷弾攻撃があって、三棟が丸焼けとなり、そのあと、新型爆弾による広島市及び周辺地域への空襲の掲示が焼け残った食堂の出入り口に貼り出された。該当者は多かった筈だが、三〇三分隊では戸上生徒が一人だった。悲惨な本校への空爆直後。急遽自習室で、分隊附教官落合正行中尉が、広島の中学出身の戸上生徒の上陸(外泊)許可の説明と周知をされた。私はその時は、正直なところ外泊ができて羨ましいなと思って、戦局の展開が矢継早やにここ迄、断末魔になっていることを初めて識った。畳み掛けてきた。

余談になるが、４月の戦艦『大和』の特攻も『呉』や『江田島本校』での追撃戦も知らず、８月９日の長崎への攻撃開始を、同じく、食堂の出入り口での新聞（タブロイド判）で初めて識った。知らされなかったのである。

ただ、身を以ての体験は、６月20日の佐世保市街の空襲による焼ける様を、針尾島からの山の『蛸壺』へ待避の観望で、終末へ転がりつつあるか??と不安は禁じられなかったのだが……かほど迄に追いつめられた破局にあったとは想像することができなかった。

戸上生徒は、後年、新制神戸大学へすすむ。敗戦、暗転で私自らも郷里への復員と慌ただしく、その侭別れて了った。彼は親戚を頼って、関西地域で少年海軍生徒から被爆した故郷を離れて、新しい人生を築いて行った。そんな出会いであった。

（二）

被爆65年の『原爆の日』。

年は移って、本年(平成22年)の広島原爆忌には、ようやく米国のジョン・ルース駐日大使が国連事務総長の藩基文氏につづいて参列された。意義ある平和記念式といえよう。私は格別広島市長の秋葉忠利氏による平安宣言の中の広島弁が身につまされた。つまりは今、懐かしいこ

の方言を主婦の語り口に置き変えてみると――

『嗚呼、やれんのォ。あっちゃいけんよゥね。こがあな、ひどい目になんで遭わにゃあ、いけんのかいのう。いけんよゥね。』言い回しの語尾をあげるアクセント……夫や娘、息子を通勤、通学途中で焼け死にさせた主婦たちは、『ピカ』以後を寡婦として、8月6日以後を深渕の中を生きたのであった。独りぼっちで生きた人達は所謂、安芸門徒とよばれる一倍敬虔な浄土真宗本願寺派に属している。

（三）

焼跡曠野。

広島大学広島高等師範学校の一年生は、昭和23年一ヶ年は広島県賀茂郡乃美尾村で、元海軍衛生学校で学んだ。漸く待望の広島市へ出たものの焼跡曠野は昭和24年でも（先述した如く）、被災そのままで、防空壕より出入りする市民は猶、東千田町地区でも残っていたし、掘立小屋状の簡単な建て物は市の主要部分を占めていた。住居と食べ物と新刊書の乏しさに終日振りまわされていた。

二年生の初めの部屋は『己斐』に恩師の紹介でお世話になり、（先述の通り）しばらくして東千田町の広島文理大正門と広島電鉄車庫との間の尚志会館へ移った。尚志会館は、級友の斡旋によるものだが、市の主要部の地域に建てられていて、場所柄としては言うことがなかった。その時、いぶかしく思ったのは、『鷹野橋』電停の背後に建っている広島日赤病院が大型の医療施設であるにも拘らず全く市民に開放されていない特別な病院だったこと。かなり忘れてしまったが、『ＡＢＣＣ』とかで米国の特定の研究のみに使用されていた。焼け跡の中の広島貯金局並の建物が活用されていないことへの不満と奇異な感じがついてまわった。市内では顔や背面にケロイドを刻み、白血病の病いや恐怖（減少又はガン化）におののいている人々も多数いると言うのに、何とも非情な存在・組織といつも思っていた。

広島駅舎に翻る英連邦軍の『管轄権限』と、米国による原爆による放射能の追跡調査、又は事務とは連繋が許容されているものなのかな？原爆病の患者の早期治療が適切に行われ得ないとしたら、由々しい問題であるのに……と電停で、掘立小屋の有様の古本屋で、新潮文庫やら時に春陽文庫も混じる書架をがちゃがちゃさせながら、独りその一方で、広島電鉄車庫迄の一望遮るものとてないロケーションの広さに毒気を抜かれた。これ程『曠野』を恣、眺望もあったし、焼け跡はどこ迄も続くのだった。

この時期の新刊書に因むと、逸早く創元社が新書と言うスタイルで、刊行をどんどん始めて、戦後昭和21年に『甚督教の起源』を発行して、私は他社の『エドマンド・ブランデンの詩集』と続いて購入していた。昭和23年に入っても、創元新書はバルザック（オレノ）の『谷間の百合』とか『富永仲基』についても刊行されて活字に飢え、空腹に喘いでいた青年に影響を与えつづけた。

谷崎潤一郎の『細雪』も、おすすめ本だった。飢えて読んだものだ。

（四）

昭和24・25年頃のスポット。

（イ）原爆ドームへは立入り自由で昭和24年に入って、圓い天井の枠を見上げたし、瓦にくい込んで溶けて融合したものや、煉瓦等も手にとって凝視したものである。矯めつ眇めつか！やゝあって、ドームの遺品は私有禁止となって、一定の制限が限界迄行ったこと。後年、京都市岡崎で産業奨励館を疎水の畔りで見て感慨無量であった。広島哀れなり。

（ロ）西蟹屋町の牧野睦君の場合は、母親が国鉄の職員であって、牧野君の弟が高等師範学校の図

書館に勤め、兄が学校を卒業して白島中学校教諭に奉職する迄、兄をサポートしつづけた。奮闘する家族の好例であろうか。

(八)私事に亘って恐縮――父岩吉が兵役を比治山の通信隊で2年間勤めて、広島市と因縁をもった。はた又、高師の校長となられた下村彦一教授の居宅が比治山の段原にあって、原子雲の下にあって、強風で烈しく揺らいで傾いていた。羅災が激甚だった痕跡を止めていた。

私は父と二代に亘る広島市との因縁を奇貨とすべきで、4年間、高等師範学校へ遊学させてくれた。明治35年生まれの厳父の志をありがたく思わざるを得なかった。私事でお許しを乞う。

二〇一〇年八月九日記

若狭越前海岸を歩く (No.5)

港　四方俊一

『人魚姫』に係る伝説がある、国道二七号線の後瀬山トンネルの北側にある、JR小浜線沿に曹洞宗空印寺がある。ここには「八百比兵尼入寂の洞窟」というところがある。昔、小浜の町に高橋の長者と呼ばれる大金持ちがいた。長者は漁業の網元でもあり、多くの船を持ち、魚を各地へ売りさばいて繁盛していた。ある時、立派な船を建造し、船出させる前に漁場を仲間と共に一回りすることにした。小浜港を出帆して二、三日経ったある日、不思議な島を見つけたので上陸してみた。そしてそこにあった宮殿で豪勢なもてなしを受けた。そこで勧められたご馳走の中に、長生きの薬として効き目のある人魚の肉があったが、仲間は気味悪がって食べなかった。しかし、高橋の長者だけはこの肉を持ち帰り、娘のしずに食べさせた。すると娘はきわだって美しくなり、肌の色もぬけるように白くなったという。このため、嫁にほしいと言って来る者が毎日引きもきらない有様で、隣村の山持長者の息子に花嫁として迎えられた。しかし、しずは十年を経ても子供は生れず、年をとることも忘れてしまったかのように、身体のどこにも衰えが見られなかった。やがて夫が死に、しずも九十才を過ぎていたが、まだ初々しい若さを失っていなかったので、孫のような大工さんの嫁になった。しかし、この夫もやがて死んでいったが、しずは相変わらず若さを保ち、少しも年をとらなかった。この後も何人かの夫を持ち、年も四百才になったが、やはり若さを失わなかった。身寄りや知り合いもとっくの昔に死に絶えてしまって、しずはつづく生きていることに飽きてしまい、父母の菩提を弔うために尼になった。しずは椿が好きであったから、みずからを『静椿比兵尼』と呼び、諸国を回って仏の道を説き、やがて再び若狭に戻って来て空印寺に住むことになった。この時、すでに八百才の歳を超えていたため、世間では彼女のことを「八百比兵尼」と呼んでいた。しかし、いつまでも死ぬことができない「八百比兵尼」は、食物を経って死にたいと考え洞窟へ入った。洞窟では鉦をたたきながらお経を読み、その鉦の音はいつまでも続いたが、やがて、その音も聞こえなくなったという。空印寺の洞窟の入口にはしずが植えたという椿が、毎年花を咲かせているということである。しずが諸国を回ったと伝えられるように比兵尼の物語は全国各地にある。近い所は栗田半島の海洋公園(つりセンター)の西側に比兵尼の像がある。地元の人でも古老

しか知らないと云う……。

このように伝説もあれば歴史もある。ＪＲ小浜駅前の大手通りに小浜市立病院があり、その前の公園には杉田玄白の銅像がある。「杉田玄白」は享保十八年（一七三三）小浜藩の江戸藩邸で生れた。父は小浜藩医杉田甫仙である。杉田玄白は幕府医官西玄甫に外科を学ぶ。そして勃興の気運に有った蘭医学に触れる。明和八年（一七七一）前野良沢と小塚ヶ原刑場（東京都荒川区南千住五丁目）で女刑死の解剖を見て、蘭方外科の優秀さを知り、良沢と共に「解体新書」の翻訳を完成させ、蘭方の優位を決定づけた。文化十四年（一八一七）八四歳で没するまで開業医を営む傍ら、随想風の筆で医学や世相風俗を論じる著書を出す等、文章表現にも長けていた。そして、梅田雲浜像が有る。彼は、杉田玄白がなくなる二年前の文化十二年（一八一五）に小浜藩で生れた。この年は杉田玄白が「蘭学の事始め」を出版した年でもあった。梅田雲浜は「定明」。通称「源次郎」と云い竹原三番町（小浜市千歳二丁目）の小浜藩士矢部岩十郎に生れ、遠縁にたる梅田家を継ぎ「雲浜」と名乗った。雲浜は藩校順造館に学び、更に京都に出て望楠軒などで朱子学を学び、特に山崎闇斉（儒学者一六一八～一六八二）に師事したのであった。

嘉永三年（一八五〇）雲浜三十五才の時、徳川方であった小浜藩の政策について意見を述べ、その後もたびたび進言した。当時小浜藩主酒井忠義は幕府の老中であり、大老井伊直弼の腹心として、条約勅許や将軍継嗣問題の処理に活躍していた。その酒井忠義に正面から反する尊皇攘夷（皇室支持者）を支持していたのである。そのため、酒井忠義に嫌われ藩籍を離れ浪人の身となり、以後勤王派の指導者となった。そして安政五年（一八五八）九月、京都所司代（慶長五年・一六〇〇設置）、（京都、伏見、奈良の町奉行の統轄するところ）小浜藩主酒井忠義の手によって捕縛され、伏見奉行所に投ぜられた。翌年正月、江戸町奉行所へ移され、小倉藩主（北九州市小倉北区）小笠原忠嘉の江戸藩邸に預けられ、同年九月十四日、獄内で病死した。東京浅草の海禅寺に墓地がある。さて、足は小浜市役所の前、国道一六二号を北へ歩く、大手橋（城郭の正面の橋）を渡ると小浜城址に至る。元の城は「後瀬山城」（小浜駅前南側の国道二七号線墜道のある山で若狭守護武田元光の代に城を築いた）で標高百六十米ばかりの街が見渡せる所にあった。ところが関ヶ原戦後には京極高次（丹後城主京極高知の兄弟）の治めるところとなり、湊としての小浜の繁栄を期するため、海辺に臨む城を築くこととし慶長六年（一六〇一）雲浜海浜地に築城した。京極高次は海と河川を利用して延々六年を要して城を形成した。その後、寛永十一年（一六三四）松江城（島根県松江市）へ転封となり、代って川越城主（埼玉県川越市）酒井忠勝が入封した。酒井忠勝は徳川家光を補佐し、老中の要職に在り、小浜に転じた後、大老となり活躍した。特に慶安四年（一六五一）、徳川家光が死去すると由井正雪（一六〇五～一六五一、江戸期の軍学者、駿河国由井村の生、門弟五千人）の乱が起り、大老酒井忠勝は家光の葬送や家綱（五代将軍）の大礼、反乱軍の処理など多忙ながらもその重責を着実にこなした。一方小浜に着任した当時、小浜城は未完成であったので、早速、江戸城富士見櫓を模して天主の造営に着手し、城下町の整備も一段とすすんだ。しかし、その建造費のための重税その他が原因となって領内の住民が抗議して立ち上がるという事件が起きている。明暦二年（一六五六）酒井忠勝隠居後、明治維新まで

十二代続いた。その間、大阪城代、寺社奉行、老中等、幕府の要職にあり、先程の梅田雲浜一件に関しては苦汁の処置であったと思われる。酒井忠義は身内（藩内）の梅田雲浜を捕縛後は時の情勢が目まぐるしく変化する中、桜田門外の変（安政七年三月、江戸城桜田門にて大老井伊直弼が水戸―薩摩浪士に刺殺される）の後には公武間（幕府と朝廷の間）の融和を図るために和宮（孝明天皇の妹）降嫁に尽力した。しかし文久二年（一八六二）坂下門外の変（水戸藩士が老中安藤信正（磐城平藩主）を襲う）契機に朝権（朝廷の権力）が伸長したため、公武周施失態の罪で京都所司代（後任に宮津藩主本庄宗秀）を免じられ蟄居を命じられ、代って子息忠氏が家督を命じられた。

この様に幕末の宮津藩と小浜藩は何かと関連することが多かった幕末の小浜藩は宮津藩と同様に一貫して佐幕派（江戸幕府支持者）であったが明治元年（一八六八）鳥羽伏見の戦いで東軍に属したのであったが薩長軍に破れた。（東軍総大将徳川慶喜、副大将宮津藩主本庄宗秀）そして先代酒井忠義の陳謝によって許され新幕府の北陸道鎮撫使の先方を努め（この時宮津藩主も参加）奥羽征伐に参戦し多数の小浜藩領民を動員した、その後廃藩置県に至り、後、滋賀県に所属することになった。小浜城址を左手に西津橋を渡るとそこは学校区で小浜中学校、小浜水産高等学校が有るところ、江戸時代は小浜藩の侍屋敷があり、小浜藩主京極氏の屋敷地である。そして国道一六二号線の小浜信用金庫の附近が大湊、小湊地区で日吉神社、玉津島神社、西方寺、源応寺が有る。今を遡ること千六百年前、応永十五年（一四〇八）六月二十二日、この小湊（吉津）に「南蛮船」が漂着したのである。南蛮船、それはインドネシア西部のスマトラ島からの船で将軍への進物として「象一匹、孔雀二羽、オウム一羽」を持ってきたと云う。当時、巨大な生物、色鮮やかな鳥を見て人々の驚きは大変なものであったと想像する。これらのものは将軍足利義持（足利幕府四代）への献上品として鯖街道を京の都へ運ばれた。当初は珍しいので物見も多かったがやがて餌に困った幕府は応永十八年（一四一一）朝鮮王朝・大宗王に日本からの貢物として贈ったと云うことであった。甲ヶ崎の村外れを旧道沿に五〇センチ程の頭を出した岩がある。月日経つうちに波が砂や小石を運び随分と埋もれた様であるが「象つなぎの岩」として地域の人々に祀られている。さてさて、小浜には昔から有名人が輩出しており、主なものを挙げてみたい。

前記した杉田玄白、梅田雲浜を除いて伴信友（江戸末期国学者）、綱女、山川富美子、幾松について述べてみたい。

「伴信友」の生誕地は、現在の県立若狭高校の敷地内の一隅であり、父は小浜藩主酒井家に勤め、御馬廻（藩主の馬管理）百六十石の山岸次郎太夫惟友で、母は同藩士片岡良雄次女さよの四男として生まれた。初名を惟徳で鋭五郎でしたが後に州五郎と改めました。そして号は「特」です。特とは若狭、山陰ではコットイ牛（雄牛）と云い、歩みはのろくとも、ゆっくりゆっくり千里の道を歩いて疲れない特牛の様にと思いこの号をつけたと云われている。「人の一生は、重荷を負いて遠き道を行くが如し急ぐべからず」この重荷を負いが、ことおい「特」です。これは信友の一生を通じた人生観でした。そして小浜藩の順造館で学び、十四才まで信友は若狭で過ごしましたが江戸の小浜藩に仕える伴平右衛門信当（御勘定頭六十石）に男の子がなかったので、婿養子に迎えられることになります。しばらくして若

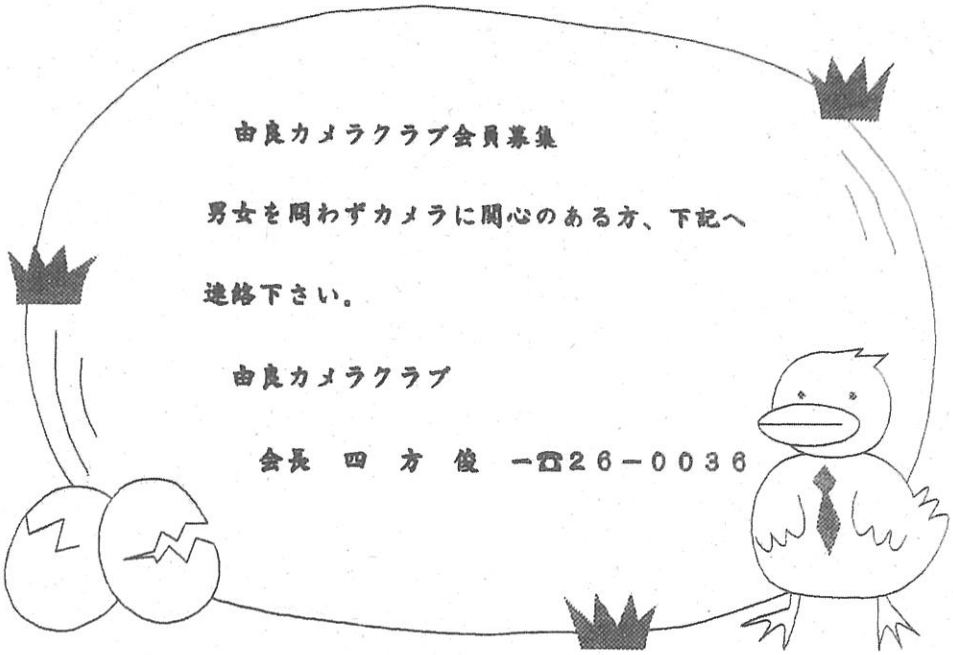
殿酒井忠進の御供番子役（忠進の側付家臣）となりました。故に信友は隙を見付けては勉学に励みます。幼い時、若狭で朱子学を学び江戸に出て漢学から国学への道を進みます。そのうちに義父の信当が七十才で没し、家督を相続します。そして文化九年、四十才で百五十石を与えられ、近習者頭（主君のそば近く仕える者の頭）に任じられます。信友は享和元年（一八〇一）国学者、本居宣長（江戸中期の国学者、伊勢松坂の人）先生の学問に傾注し、本居大平（本居宣長の養子）の計らいで宣長没後の門人となった。晩年、小浜藩の国学の基礎を築き、若狭の歴史と文化の発展に貢献しました。信友は弘化三年（一八四六）七四才で京都所司代官邸において亡くなり、小浜市発心寺に葬られた。

次に「綱女」であるが、西津の人々が崇める祠であり毎日献花が断えないと云う。漁師、角左衛門の娘（綱）は宝暦四年（一七五四）に生まれ、明和六年（一七六九）十五才の時、奉行先の主人、松見茂太夫の幼児を子守中、突然狂犬に襲われましたが、幼児を懐に抱き抱え、身をもって狂犬から守りました。しかし自らは噛み付かれて家族の看病の甲斐なく約二十日後に亡くなりました。当時、この事が藩主（酒井忠存）の耳に入り、家老からその善行が誉められ石碑と墓地が与えられました。西津の街中の道路脇に祠られています。

さてさて、小浜で忘れてはならない女性が居る。「幾松」である。幾松は、小浜藩士木咲市兵衛と福井藩三方郡柚子浦（現若狭町柚子）の医師、細川益庵の娘、すみとの間に生まれ幼少時「計」と名付けられました。木咲家はなかなかの名家であったが市兵衛の上役に不正があり、その連帯責任で市兵衛も失職してしまった。市兵衛は妻子を残して京へ出奔した。計は父のあとを追って京へ出るのであるが、めぐり合った父は病に倒れ、食うや食わずのひどい状態であった。計はその父によって難波垣次郎という男の養女に出されるが、やがてこの家も借金で傾いてしまいます。そして垣次郎によって、十四才の時、三本木（現京都市役所横の京都ホテル前）に芸者に出されます。そして名を「幾松」とされた。当時の京は政治の中心であった。勤皇（天皇親政のため徳川幕府打倒を目指す政治活動）にしろ佐幕変革の志を持った男たちが続々と集って来る。さらにまた、この動乱に乗じて一山当てようという連中も来る。そして夜毎、花街へと繰り出す。藩や幕府から出た金で豪遊し、女を買う。日本の夜明けのために、と云う大義名分があるのだから何をしても許される。男たちにとって最高の時代であったのかも知れない。当時の芸者や女郎たちの間では、志士を恋人に持つのが最高と云われていた。故に明治政府の立役者となった男たちの妻は、色街の女性が多く、明治維新というのは特殊な一部の男と一部の女たちで演じられたと云われている。長州藩の藩邸は、現在の京都ホテルがある場所で幾松のいた三本木と眼と鼻の先で藩士は盛んに三本木へ遊びに行った。桂小五郎も他の藩士と同様遊びに行き、美貌の幾松を見そめ、熱心に通うようになった。幾松にしても相手が小五郎なら申し分ない。数多くの志士のなかでも小五郎は優れていて、恋はまたたくまに燃え上がった。小五郎は幾松を落籍（芸者の置屋の借金を払い引取ること）せ、藩邸のすぐ裏の木屋町に囲った。そのうち長州征伐（幕末、江戸幕府が行った二度にわたる長州藩攻撃）が起り、桂小五郎も乞食に身を俏して京都を脱出し、但馬出石に潜伏した。その小五郎を探し求めて長州へ、そして

出石で会うのである。乞食に身を俏した時は幾松自ら三条大橋の下へ握り飯を入れたりと云うことは数多くの伝説、小説、映画の題材となっている。潜伏した出石では町人として雑貨屋の主人に変装したとも云われている。そして明治維新、桂小五郎は木戸孝充と改名し、西郷隆盛、大久保利道と並び維新の三傑の一人と称された。幾松はやっとのことで正妻の座を得、名を幾松から「松子」と変えた。しかし木戸孝充は次々と改革を行ったが長生できず明治十年（一八七七）五月二十六日、四四才で他界した。松子は髪を下して尼になり、それから九年後の明治十九年（一八八六）に世を去るまで、隠遁生活を送ったのであった。

次号に続く。



＊ちいーと知っ得＊
穴太寺と山椒太夫

亀岡市にある穴太寺、西国三十三所二十一番の札所としてよく知られているが、厨子王丸肌守御本尊が祀られていることはあまり知られていない。

安寿と厨子王丸が山椒太夫から過酷な責めを受けた時、その苦しみを代わりに受けてくださった仏様です。

安寿が厨子王丸をかくまった寺といわれ、厨子王丸はこの肌守御本尊を穴太寺に奉納し供養したと伝えられている。

この御本尊は秘伝として一般拝観することは出来ないが今年の6月から11月30日まで特別拝観ができる。

機会があれば一度訪ねてみたら……これも何かの縁かも知れない。（飯澤）

編集後記

今年の夏は猛暑であったが、気象予報士によると猛暑の年の冬は厳冬になる傾向が強いと発表している。今年は太平洋高気圧が強すぎたのが原因とされているが、猛暑に厳冬、家庭の台所が大変な出費になり大変なしわ寄せになる。私たちを取り巻く環境が少しずつ変わってきているのを感じる。

あのイチロー選手が昨年に続き偉大な記録を達成した。10年連続200本安打。打者に対する偉大な勲章を獲得した。一生忘れられない屈辱的な出来事があるという。大リーグ1年目のオープン戦。大リーグの投手からヒットを打てますか？と聞かれた。「今はヒットが出ないと、なぜ出ないのかに変わった。この10年でそういう状況を作れたのには気持ちよさがある」「僕の野球に対する思いは変わらない。200安打には思いもある」

天才打者と言われる36歳の彼には一切おごりはない。

大あっぱれ!!を送りたい。

（枝川）